

火山がつくった世界遺産・富士山

小山真人

今の富士山の土台となっている古富士火山が生まれたのは、今から 10 万年ほど前である。古富士火山は、噴火のたびに噴出物を積み重ねて成長を続けたが、約 1 万年前を境にして山頂の位置がやや西に移動し、現在の富士山（新富士火山）ができた。

しかし、富士山の成長は、ずっと順調だったわけではない。山体崩壊が起き、それまで存在した美しい山体が崩れてしまう事件が何度か起きた。富士山でもっとも新しい山体崩壊は、2900 年前に起きた「御殿場岩屑なだれ」である。最近の調査によって、この時に主に崩れたのは、今の山頂の東側にあった古い峰（古富士火山の一部）であることがわかった。つまり、2900 年前より古い時代の富士山は、東西 2 つの峰が並び立つツインピークだったのである（図 1）。

御殿場岩屑なだれの後も、富士山は噴火を続けた。富士山の噴火というと、山頂火口の噴火を想像する人が多いだろう。ところが、2200 年前に起きた山頂噴火の後、富士山の噴火は、なぜか山腹や山麓でばかり起きるようになって現在に至っている。平安時代の 864 年（貞観六年）には、北西山腹で起きた噴火によって大量の溶岩が流出し、もとあった「せの湖」と呼ばれる大きな湖を埋め立て、分断してしまった。つまり、この噴火の前に富士五湖はなく、「富士四湖」だったのである。江戸時代の 1707 年（宝永四年）には、南東山腹で大規模な噴火が起きた（図 2）。宝永噴火と呼ばれるこの噴火は、大量の火山灰を広い範囲に降り積もらせた。この火山灰は、農作物や農地に大きな被害を与えたうえ、雨のたびに土石流や洪水を引き起こし、噴火後も数十年の長きにわたって人々を苦しめた。将来も起きるであろう噴火に備えるために、富士山のハザードマップや広域避難計画などが整備されている。

しかしながら、富士山がなかったら、今日みられる恵まれた地形や、そこに育まれた豊かな自然環境は生じなかった。富士山一帯のなだらかな裾を引く地形は、主に溶岩流と土石流によって形成されたものである。さらに、富士山の南西麓には富士川河口断層帯があり、活断層が地震のたびに土地を盛り上げ、星山丘陵を作ってきた。その結果、かつて富士川に流れ込んでいた溶岩や土石流が、星山丘陵によってせき止められるようになった。そのおかげで、現在の富士宮一帯が盆地となって、水がたくさん湧き出す自然環境が成立した。冷え固まった溶岩流にはすき間が多いので、自然の水道管となって雪どけ水を運び、富士山麓の各地に大量の湧水をもたらしている。

世界文化遺産となった富士山の構成資産の多くは神社、遺跡、登山道などの人工物であるが、それらを取り巻く景観は自然が成り立たせたものである。また、構成資産には湖沼・滝・溶岩樹型などの自然の造形も含まれている。したがって、構成資産を末永く保全するための計画は、個々の資産ならびに周囲の自然環境の成り立ちや将来象を十分見越したものでなければならない。



図 南から見た 3000 年前頃の富士山の想像図（御殿場市作成、筆者監修）



図 1707 年富士山宝永噴火の再現画像（御殿場市作成。筆者監修）

参考文献

富士山大噴火が迫っている！最新科学が明かす噴火シナリオと災害規模 小山真人（2008 年）技術評論社

富士山 大自然への道案内 小山真人（2013 年）岩波新書

ドローンで迫る伊豆半島の衝突 小山真人（2017 年）岩波科学ライブラリー